

《新刊紹介》

ルトガー・ブレグマン著（野中香方子訳）
『隷属なき道——AI との競争に勝つベーシックインカムと
1日3時間労働』

浮網 佳苗

現在のわたしたちの社会はさまざまな問題が山積みである。長時間労働、貧富の格差拡大、少子高齢化など挙げればきりが無い。タイトルからもわかるように、本書の主張を端的に言えば、こうした問題を緩和するには、ベーシックインカム制度 Basic Income（以下 BI）、つまり、国民全員への一律の現金給付が最も有効だというものである。ここ最近、BI をめぐる議論は経済学者を中心に一気に広まったように思われるし、BI 関連の書籍も一般書を含め多数出版されている。ただ、本書が特異なのは、社会の問題を解決する方策としてなぜ BI が有効なのかを、経済学や社会政策の専門家ではない、歴史家が説明している点である。オランダ出身の著者ルトガー・ブレグマンは、ユトレヒト大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校で歴史学を学んだ後、すでに4冊の本を出している。ブレグマンは、広告を一切入れず購読者収入のみからなる、オランダのウェブメディア「レ・コレスポネント」（2013年創設）に所属し、その媒体に投稿していた記事を本書にまとめた。

歴史を振り返れば、寿命から生活水準に至るまで、現在のわたしたちの生活が向上してきたことは間違いないだろう。第1章「過去最大の繁栄の中、最大の不幸に苦しむのはなぜか？」では、世界の所得や平均寿命、人口、栄養状態、教育、犯罪などの過去100年ほどのデータを示して、現代社会がかつてない繁栄の時代だと述べる。しかし、精神病のかつてないほどの増加にみられるように、わたしたちは幸せを実感できていない。つまり、資本主義だけで人類の生活を維持するのは難しく、生活の質を上げるための別の道をみいだす必要があると主張する。

第2章「福祉はいらぬ、直接お金を与えればよい」では、20世紀後半以降にイギリス、カナダ、ケニア、ウガンダなど世界各国で行われた、無条件に現金を給付するという数々の実験事例をもとに、現金給付がわたしたちの生活に与える効果が考察される。実験の結果、現金給付が人を怠惰にさせるという一般的想定を覆し、受給者は仕事を辞めることなく生活の質を上げるために現金を使った。また、被験地域の治安は改善し医療費が減少するなどポジティブな効果が認められた。こうした結果を根拠に、BIの有効性を強調する。

では、逆に、お金がない状態、つまり、貧困は人間や経済にどのような影響を及ぼすのだろうか。第3章「貧困は個人のIQを13ポイントも低下させる」では、実験事例やデータを示し、金銭の欠乏が精神面や知能にネガティブな影響を及ぼすうえ、経済成長をも阻害することを明らかにしている。貧困と闘うことは、救貧の費用を浮かせ、あらゆる人が質の高い生活を享受することにつながると主張する。

貧困が政府や人々にどのように認識されていたのかが、第4章「ニクソンの大いなる撤

退」では述べられる。ニクソン大統領は1970年代に、1300万人のアメリカ人に現金を給付するという、ほぼBIのような法案を成立させようと躍起になっていた。この法案に反対した政治家がニクソンを説得させるために引き合いに出したのが、近代イギリスで実施された、BIと類似するスピーナムランド制度（1795～1834年）の失敗であった。その結果、世論もニクソンの法案に反対するようになり、この法案は棄却された。この背景には、貧困からの脱却は「働いて手に入れるべき特権であり、誰もが得られる特権ではない」という誤解があった。著者のブレグマンによれば、近年の研究では、スピーナムランド制度は実際は効果をもたらしたにも関わらず、当時の反対者によって資料が捏造され、失敗とされてきたというのである。この資料によって、スピーナムランド制度のような現金給付の救貧は、現在に至るまで効果がないとされてきた。

ここで、よりよい生活とは何かを考えるヒントとして、GDPが挙げられる。第5章「GDPの大いなる詐術」では、しばしばわたしたちの幸福を測るものさしとして用いられるGDPの数値が見逃している、人間の重要な活動が指摘されている。GDPは戦後に経済成長を目的に発明された指標にすぎず、犯罪や不平等、ボランティア、社会的つながりなど「人生を価値あるものにする」ために考慮すべき要素が含まれていない。したがって、これら要素を含んだ新たな指標を創り出すことを提案している。

では、具体的に何が人生を価値あるものにするのか。第6章「ケインズが予測した週15時間労働の時代」では、経済成長にともなって労働時間が減少するというケインズの予測に反して、かつてないほどの長時間労働に人類が悩まされていると指摘する。著者は、労働時間の短縮は、環境問題、ストレスの軽減、失業、女性の解放、高齢化、格差などあらゆる問題の緩和につながるうえ、労働以外の自分の本当に好きなことに費やせる時間が増えると主張する。

自分の好きなことをするとは、社会にとって価値があると自分が思える仕事に従事することである。第7章「優秀な人間が、銀行家ではなく研究者を選べば」では、市場が品質や有益さではなく、儲けを重視する結果、優秀な人材が金融部門のような社会に負の影響を与える仕事に流れていくことが問題視される。ごみ収集作業員や教師、研究者など社会になくしてはならない仕事こそ重視されるべきで、そのためには、教育によって、わたしたちはいかに生きるべきかを教えることが重要だと強調する。

第8章「AIとの競争には勝てない」では、人工知能の発達は不可避であり、それは失業と格差をますます拡大させると予測する。テクノロジーの恩恵を受けつつ、失業や格差を避けるには、金銭や時間の再分配、つまり、BIの実施と労働時間短縮が必要だと主張する。

さらに、話題は、移民の自由な受け入れにまで及ぶ。第9章「国境を開くことで富は増大する」では、国境を開放し、人の移動が自由になることで、貧富の格差が緩和され、世界経済が成長すると述べる。近年のさまざまな比較実験によって、先進国による発展途上国への支援はその金額の割に、役に立っていない可能性が指摘されている。開発支援に多額の資金を投じるよりも、国境に規制されず人が自由に働きたい場所へ移動できる世界の

方が富を生み出すと主張する。

労働時間短縮、BI、国境の解放などは非現実的だと多くの人は反論する。しかし、第10章「真実を見抜く一人の声が、集団の幻想を覚ます」では、奴隷制度の廃止や女性参政権実現などいずれも当時は非現実的だとみなされていたことが実現に至った歴史を振り返り、革新的なアイデアやユートピアへの志向は、いつの時代も狂気とみなされるが、こうしたアイデアがないと世界はより良くなしないと主張する。

終章『「負け犬の社会主義者」が忘れていたこと』では、数々の社会変革を推進してきた左派と呼ばれる人々の現在の問題点を述べている。彼らは現状を批判するだけで覇気がなく、語るべき物語とそれを伝える言葉を持っていない。「進歩を語る言語」を取り戻し、革新的アイデアを行動に移すことが重要だと強調して締めくくられている。

以上を概要とする本書は、歴史学の成果や膨大な実験データを根拠に、BIの導入を提言すると同時に、BIが長時間労働や失業、少子高齢化など社会のさまざまな問題とつながっていることを明らかにしている。人類はさまざまな自由を手にしたが、いまだに稼ぐための労働からは逃れることができていない。BIが、苦痛な労働の時間を減らし、より好きなことに人生の時間を注げるようにしてくれる可能性が高いという主張は、働くこと、ひいては、いかに生きるかについて考えさせてくれる。

確かにBIのこうした可能性はすでに経済学者たちが指摘しているところだが、彼らは数値や経済理論に依っているのに対し、本書はこれら成果を用いつつも、歴史的背景を深く掘り下げることに重心がある。せっかくなので、著者の歴史に対する考えを引用しておく。

歴史とは、日々の生活に役立つ手頃で安直な教訓を提供する学問ではないが、過去を振り返ることは、いま直面している試練をより広い視野で見ることが可能にする。

〔中略〕現在のわたしたちの苦しみについて、歴史家は広い視野を越えた何かを提供するべきだ。〔中略〕世界の現状は、ルールのある進化の結果ではない。それは歴史上のささやかながら重大な歪みやねじれの結果なのだ。(81-82頁)

本書は歴史の研究書ではないが、現代のテーマに歴史学研究成果を取り入れた興味深い内容である。ビジネスマンにもよく読まれているという本書は、歴史学の意義が問われる昨今、社会に向けた発信方法のヒントを与えてくれる。また、著者のブレグマン自身、アカデミックなバックグラウンドを活かして、アカデミックな世界の外で活躍しているという意味でも、博士課程を終えた人々の大学以外での活躍の可能性をも示してくれる。

(四六版 312頁 2017年(原著2014年) 文藝春秋 税別1500円)

(京都大学大学院博士後期課程)